

詩のアイデンティティ

中ザワヒデキ 評

詩のアイデンティティとは何か。それは文字であるとした場合の解答が新国誠一の詩であった。文字の視覚面と音声面から視覚詩と音声詩を演繹する。文字を意味伝達的手段に貶めない。文字という具体物への還元が詩である。

それゆえ物質を精神に従属させないと宣した日本の具体美術や、音響を楽音から解放したフランスの具体音楽と呼ぶ。「具体」という観念は、いわば20世紀中葉の諸芸術に君臨した世界標準だったと言いたいところだが、実際には新国は戦後の国内詩壇から無視され続けた。それゆえ今回の国立美術館での展覧会、詩専門の出版社からの図録を兼ねた詩集の刊行、詩集へのCD付帯の三件は、幽がゆい思いをしてきた周囲の者

にとつて悲願達成の意味が大だ。

例えば国立国際美術館の建島哲。若い頃に生前の新国を自宅に訪ね、しかし自身は具体詩と対極の散文詩人として大成、美術評論家としては同館館長となり本展を主導した。詩人であることと美術評論家であることは無関係と弁明するが、フォーリスティックな純粹化による諸芸術分断の煽りではないとは言えまい。詩は詩であらうとした結果の詩を美術館やCDで発表する奇天烈が露呈する。

詩のアイデンティティとは文字であるという初期設定がこれらの事態を喚んだ。考慮されるべきは写真植字とテープレコーダー。前者は文字級数や配置を操作したり部品だけ取り出したりでき、その結果、文字の視覚性が際立ち原

稿用紙に書き戻せない。後者は多人数の同時発声や速度制御を可能とし、その結果、文字の音声が際立ち原稿朗読に聴き戻せない。テクノロジーとの出会いが生んだ過剰としては、自動ピアノのために作曲したコンロン・ナンカロウに似る。時間軸への楽音配置の自由の加速と、平面への文字配置の自由の加速は、ともに音楽や詩の本質拡張だったはずだ。しかし楽壇や詩壇は冗談扱ひした。

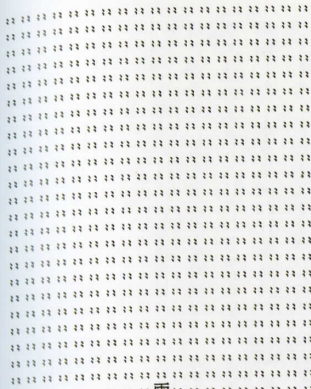
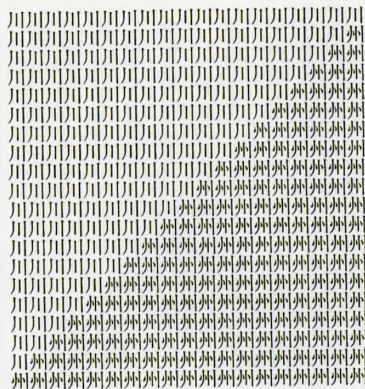
戦中に抒情詩を書き、敗戦の価値転倒で意味伝達を懷疑した経緯は、松澤宥に似る。新国が主宰した機関誌『ASA』は北園克衛が主宰した『VOU』と対立したが、『VOU』に一時在籍した松澤も抒情詩とは決別し、ただしその後は真逆で、文字を使わない記号詩に漂着し美術家に転じた。今回の調査で発掘された新国の手書き詩篇は松澤のウ(プサイ)絵画に酷似し恐ろしい。そして海外からのオフアアに

え続け、国内で無視された構図は具体美術に似る。前衛書道との接点から期待された現代美術の東洋枠と、表音文字圏から羨望された現代詩の表意文字圏枠のことだ。ここで漢字はletterでなくword単位の分節で、漢字も仮名も方形なことが世界の具体詩から新国一派を峻別した。具体美術と『ASA』との接点は、両者に在籍した仙台の菅野聖子だ。

0と1に依拠するコンピューターで詩も絵画も音楽もつくられる今、詩のアイデンティティは文字ではない。私が提唱した方法主義では文字は絵画や音楽の素材でもある。逆向きに言おう。ようやく新国が解毒され歴史化される時が来たのだ。詩壇からの無視は取るに足らないからか、封印されなければならぬからか、往時にはわからない。新国は後者だった。

PROFILE

なかざわ・ひでき 美術家。1963年生まれ。主な著書に『近代美術をキリスト』(西洋画人列伝)現代美術史日本篇。



上左—雨 1966
上右—川または州 1966
下—展示風景 撮影=福永一夫

新国誠一の《具体詩》
詩と美術のあいだに

国立国際美術館

2008年12月6日～2009年3月22日

武蔵野美術大学美術資料図書館(東京、6月8日～29日)に巡回予定。

新国誠一は1925年生まれ。77年没。1950年代から郷里仙台で詩の前衛的実験を始める。62年に上京、詩集『0音』を発表。国内のコンクリート・ポエトリー(具体詩)の第一人者として活躍する。本展は新国の活動を現存資料の調査をもとにあらためて見つめ直した初の回顧展。展覧会に関連して『新国誠一 works 1952-1977』も発売中(音声詩を収録したCD付き、思潮社刊、3675円)。